

## 武蔵野日曜聖書講筵

## 磐上の家

——マタイ伝第7章24～29節、25章31～46節——

1983年4月10日

小池辰雄

柱を磐の中に食い込ませて キリストはわが磐 信行一如 人助け 十字架上の片一方の盜賊  
十字架の絶対恩寵 十字架聖霊即復活の生命 使徒的信仰に帰れ 有れども無きが如し 第二  
の自然人 聖霊の権威

## 【マタイ7】

24 さらば凡て我がこれらの言をききて行う者を、磐の上に家をたてたる慧  
き人に擬えん。 25 雨ふり流れ漲り、風ふきて其の家をうてど倒れず、これ磐  
の上に建てられたる故なり。 26 すべて我がこれらの言をききて行わぬ者を、  
沙の上に家を建てたる愚かなる人に擬えん。 27 雨ふり流れ漲り、風ふきて其  
の家をうてば、倒れてその顛倒はなはだし』

28 イエスこれらの言を語りおえ給えるとき、群衆その教に驚きたり。 29 それ  
は学者らの如くならず、権威ある者のごとく教え給える故なり。

## 【マタイ25】

「31 人の子その栄光をもて、もろもろの御使を率いきたる時、その栄光の座位  
に坐せん。 32 斯て、その前にもろもろの国人あつめられん、之を別つこと  
牧羊者が羊と山羊とを別つ如くして、 33 羊をその右に、山羊をその左におかん。  
34 爰に王その右におる者どもに言わん「わが父に祝せられたる者よ、来りて  
世の創より汝等のために備えられたる国を嗣げ。 35 なんじら我が飢えしとき  
に食わせ、渴きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、 36 裸なりしときに  
衣せ、病みしときに訪い、獄に在りしときに来りたればなり 37 爰に正しき者  
ら答えて言わん「主よ、何時なんじの飢えしを見て食わせ、渴きしを見て飲  
ませし。 38 何時なんじの旅人なりしを見て宿らせ、裸なりしを見て衣せし。 39  
何時なんじの病み、また獄に在りしを見て、汝にいたりし」 40 王こたえて言  
わん「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小さき者の一人になし  
たるは、即ち我に為したるなり。 41 斯て左におる者どもに言わん「詛われた  
る者よ、我を離れて悪魔とその使らとのために備えられたる永遠の火に入れ。  
42 なんじら我が飢えしときに食わず、渴きしときに飲ませず、 43 旅人なりし



時に宿らせず、裸なりしときに衣せず、病みまた獄に在りしときに訪わざればなり」<sup>44</sup>爰に彼らも答えて言わん「主よ、いつ汝の飢え、或は渴き、或は旅人、あるいは裸、あるいは病み、或は獄に在りしを見て事えざりし」<sup>45</sup>ここに王こたえて言わん「誠になんじらに告ぐ、此等のいと小さきものの一人に為さざりしは、即ち我になさざりしなり」と。<sup>46</sup>斯て、これらの者は去りて永遠の刑罰にいり、正しき者は永遠の生命に入らん』（マタイ25・31～46）

●柱を磐の中に食い込ませて

<sup>24</sup>さらば凡て我がこれらの言をききて行う者を、磐の上に家をたてたる慧き人に擬えん。

「行う」という字は、「ポイエオー」という、元は「ポエム」というギリシヤ語ですが、「造る」という字と同じです。その前に7章17節に、

17 斯く、すべて善き樹はよき果をむすび、悪しき樹は悪しき果をむすぶ。

とあるが、この「結ぶ」という字と同じ字なんです。英語だと「メイク」（作る）と「ドゥー」（行う）の両方の意味をもっています。実際に、実践して現実にあらわす、作り出すというわけで、観念でない世界です。

「凡て我がこれらの言をききて行う」

そういう者は

「磐の上に家をたてたる慧き人に擬えん。」

と。この二つの言葉はちよつと論理的にはつながらないような言葉です。

「聴いて行う者を磐の上に建てた人にならずらえん」

と。キリストはこの

「磐の上に建てた」

と言うときに、この内容が非常に深いわけです。「磐」とは「ペトラ」という字です。磐の上に建てた家は、風が吹こうが、雨が降ろうが、洪水みたいに流れ漲ろうが、それでも押し倒されない、押し流されないというわけです。

私はそれを聴いていて、

「磐の上に建てただけでは、それではやられてしまいやしないか。柱を食い込ませなければ」

と思った（笑）。何しろ、私はすぐそういうことを考える。柱を磐の中に食い込ませて、コンクリートかなにかで固めてしまえばいいわけだ。まあ、冗談のようで、これは本当なんです。ただ磐の上に乗っかっていただけでは、物理的にもちよつと危ない。そうやって食い込ませる。そうしたらば、どんなことがあっても大丈夫だと。

「それは私の言を聴いて行う者だ」



と。「きく」は「聞」ではダメだ、「聴」でない。心を入れてきくことを「聴」という。「聞」はただ聞こえることだ。「聴講」と言うが、「聞講」とは言わない。講義を聴く。聞いて、上の空で聞くと、耳から耳へぬけてしまう。この「聴」でないと、心の中に入っていない。だから、聴くということが身体の中に、心の中に、魂の中に入るということを意味している。聴き入る。聴入だ。聴入という言葉はないですよ、今日、初めて使う。今、思いついた。私は話しているうちに、何でも出てくるから仕方がない。

聴入しなくてはいいかん。聴き入れなくては。聴き入れたものは、今度はいいに出てこなくてはいかん。本当に聴き入れば、今度はいいに出ざるを得ないわけです。だから、

### 「聴いて行う」

とキリストが言ったときに、その「聴いて」の内容を掘り下げないといかん。聴き入れば、自然に行わざるを得なくなってくる。そうでないものは、聴き入っているのではない。聴き入ったまままで、そのままでしたら、それは腐ってしまふ。それは必ず展開して行かなくては。生命というものは動いているものですから。何でも生命的でなければダメです。

この集会は、本当に聴き入って、そうして、身体の調子が悪かろうが、心の調子が悪かろうが、みんなそれは変化を起こして、凄いいことになっていく。そういう集会をやっているんだからね。そこらのお説教とは違うんだ。

### ●キリストはわが磐

ペテロに

### 「お前は磐だ」

と、キリストは言われたけれども。

### 「その上に教会を建てる」

とはキリストの言葉とは思えない。「教会を建てる」というのは後から付けた。けれども、磐の磐たるものはキリストです。千歳ちとせの磐という。永遠の磐である。

### 「エホバはわが磐なり」

と詩篇に出てくる。あれは

「キリストはわが磐なり」

と、マルチン・ルターならば必ずそういうように解釈する。

磐の上に柱が食い入らなければダメなんです。これが我々が言っている「エン・キリスト」の世界なんだ。「キリストの中に」ということ。「の中に」というのは状態だけれども。大事なのは、その状態が恒常的でなくてはいかん。常に動かない。だから、この柱は岩の中に食い込んで、常に食い込んで離れない。そうしたら、雨、風、嵐、何でもござれと。いかなる患難にもびくともしない。雨や風の方がよけてしまふ。そういうのが不動のもの。本当に聴き入れば、聴き入った世界はキリストの霊の世界ですから、御霊が動いている世界



ですから。聖霊が動いている、宿っている世界だから、その聖霊に触れるわけだ。聖霊が自分の中に入ってくるわけだ。

「聖霊」という言葉が躓きになって困る。けれども、非常に動的な霊です。

「聖霊の始めの名は愛なり」

と言う。愛とは外に向かって、人を助け、担い、救っていく、その行為を愛という。感情ではない。感情的な愛ではダメなんです。思われたる愛でもダメ、感情の愛でもダメ。行為的なんです。具体的に行動を起こさなくては。その時に、その人は本当に生命的であるわけです。生命と愛とは離すことができない。愛のない生命は生命ではない。「永遠の生命」なんて言ったって、ただ長生きすることが何もいいのではない。

受けとる世界が本当の信仰の世界です。「信仰」ではなく「信受」と言いたい。信じ受けとる。あるいは、信じ交わる、「信交」です。これは交わっている世界です、岩と柱が。これが信交の事態です。交わるところには、御霊の力が、生命が通うからね。

### ● 信行一如

カトリックとプロテスタントの違いは、信仰と行為の問題です。プロテスタントでは

「信仰のみ。信仰によって義とされる」

と言う。カトリックでは、ヤコブ書のように、

「行為を伴わなくてはいかん。行為なき信仰は虚しい」

と言う。これはパウロだつて言ってますけれども。プロテスタントは「信仰」を非常に強調し、カトリックでは「行為」面を非常に重んずる。それで、いつまでもプロテスタントとカトリックに別れてしまっている。もちろん、そればかりではないですよ。カトリックはローマ法王を認めて、大きなヒアラルヒーの宗教形態、宗教政治的なものになっている。そこがカトリックの第二義的な重要なところなんでしょうけれども。問題は要するに信仰と行為の問題なんです、いつまでたつても。これはいくら分析的に考えたつてダメです。信行一如の世界を、どっちもが本当に捉まないと。

「ただ信仰のみ」

と言っているのもダメだし、行為をただ重んじているのもダメです。では、信行一如というのは如何にして可能か。

現実の人間には、完全になりにきれません。だから、プロテスタントの、

「信仰によって義とされる。義人であると同時に、またいつまでも罪びとにすぎない。クリスチャンは義人にして罪びとである」

とマルチン・ルターが言った。それは真理です。義を賜ったんです。

「義とされている」

というのと、



「義を賜る」

というのと、二つの意味がある。これはむしろ、義を賜るということ、「賜りたる義」という方が深い内容です。

これが如何にして一如であるかという点、これはどうしたって、「聖霊（ Pneuma ）の問題にやってくる。聖霊が来なければダメなんです。聖霊が来ても、人間はそれでもなおズレがある。いいんです。これは仕方がない。ズレをいくら問題にしたって、人間というものはしようがない。全き義人であるのはキリストの他にいないんだから。

「万人は罪びとである。義人なし一人だになし」

とパウロが言ったのはそのことです。いくら信仰によって義とされようが、また、御霊をいただこうが、それでもなお、我々の中にはズレがある。躓いたり転んだりやっているけれども、この信仰一如の生命的な構造になるためには絶対に聖霊を必要とする。そこに問題の焦点を持つてこなかったらダメです。その先は、その人をどう判断なさるか、これは神のわざです。人間がすることではない。一人びとを人間が評価するのは大間違い。神さまだけが知り給う。

「汝知りたもう」

という世界です。人が人を評価できない。自分で自分も評価できない。厳密な意味では本当に正しい自叙伝というのを書けないんです。

とにかく、生命の中心は何と言っても、この聖霊ですから。キリストの霊が来ないうちは、知情意の世界が本当の生命的な、本当のハーモニーを持った展開ができない。

### ● 人助け

「聴いて行う者は」

とキリストが言われたけれども、キリストの言葉をそれだけ持つてきて、

「そこうすると、これは行わなくてはいかん」

と、みんなこう思うわけだよ。キリストが

「信仰で天国に行けない。行わなくてはダメだ」

と言ったと。

これはマタイ伝25章31節から、

「31 人の子その栄光をもて、もろもろの御使を率いききたる時、その栄光の座位に坐せん。32 斯て、その前にもろもろの国人あつめられん、之を別つこと  
牧羊者が羊と山羊とを別つ如くして、33 羊をその右に、山羊をその左におかん。」

34 爰に王その右におる者どもに言わん「わが父に祝せられたる者よ、来りて世の創より汝等のために備えられたる国を嗣げ。35 なんじら我が飢えしときに食わせ、渴きしときに飲ませ、旅人なりし時に宿らせ、36 裸なりしときに



衣せ、病みしときに訪い、獄に在りしときに来りたればなり」

そういう行為を、愛の行為をした者は天界に行けると。正しき者がそう言われたときに、「いつ、私はそんなことをしましたか」と答えた。そのところは面白いね。

37 爰に正しき者ら答えて言わん「主よ、何時なんじの飢えしを見て食わせ、  
渴きしを見て飲ませし。38 何時なんじの旅人なりしを見て宿らせ、裸なりし  
を見て衣せし。39 何時なんじの病み、また獄に在りしを見て、汝にいたりし」

40 王こたえて言わん「まことに汝らに告ぐ、わが兄弟なる此等のいと小さき  
者の一人になしたるは、即ち我に為したるなり。」

「隣人に為したるものは」——「隣人」というのはとにかく、ぶつかる人は何でも隣人です——「それは私にしたんだ」と。神さまに向かって、キリストに向かってしたことなんだと。だから、

「神を愛することと、隣人を愛することとは一つだ」

ということをキリストは言っている。そういう愛の行為がなければ、天国には行けないと。

もう片一方は、山羊に例えられた方は、

41 斯て左におる者どもに言わん「詛われたる者よ、我を離れて悪魔とその使  
らとのために備えられたる永遠の火に入れ。42 なんじら我が飢えしときに食  
わせず、渴きしときに飲ませず、43 旅人なりし時に宿らせず、裸なりしとき  
に衣せず、病みまた獄に在りしときに訪わざればなり」44 爰に彼らも答えて  
言わん「主よ、いつ汝の飢え、或は渴き、或は旅人、あるいは裸、あるいは  
病み、或は獄に在りしを見て事えざりし」45 ここに王こたえて言わん「誠に  
なんじらに告ぐ、此等のいと小さきものの一人に為さざりしは、即ち我にな  
さざりしなり」と。46 斯て、これらの者は去りて永遠の刑罰にいり、正しき  
者は永遠の生命に入らん』（マタイ25・31～46）

人助けをしなかった者は、これは神さまに向かって本当に愛の行為をしなかった、信仰の行為をしなかったということと同じだと。人間を地獄と天国に分ける基準は何かというと、要するに、愛の行為だということです。だから、

「ただ信仰ではダメだ」

とカトリックでは言うわけです。その通りなんです。

### ● 十字架上の片一方の盗賊

ところが今度は、十字架上の片一方の盗賊はさんざん悪いことをした。当然、十字架にかけられる。その十字架にかかった盗賊は何も愛の行為なんかやってはいない。反対の行為ばかりやっていた。それが、最後に

「悪いことをして申し訳ない。せめても、私を覚えてください」



と言って、心が砕けた。砕けたら、キリストは

「お前は今日、私と一緒に天国だ」

と言われた。それでは、どうしてくれるんですか、この判断を。

十字架上の二人の盗賊のうち、片一方は

「お前は神の子なら、俺たちを救ったらいいだろう」

なんて、傲慢に言っていた。もう片一方は

「私たちは悪いことをした。あなたは何も悪いことをしてないのに十字架にか

かっている。せめても、私を覚えてくださいませんか」

と、これは心が砕けた。こちらの心砕けたやつはキリストと一緒に真先に天界に入ってしまった。

単なる平面論理でもって聖書は読めないんです、非常にドラマチックな構造ですから。だから、私は

「聖書はドラマである」

と言っている。組織神学では神の真理は捉<sup>つか</sup>めない。非常にドラマチックなものだ。その判断はただ神さまだけがするので、我々は

「天国に行ける資格はどうこうである」

なんて限定はできない。ただ問題は、本当に心が砕けることです。しかし、この砕けもまた砕けきれない。では、どうしたらいいのだろうか。

### ●十字架の絶対恩寵

それは、いつも申し上げているとおり、十字架なんです。十字架は、砕けきれない我々を徹底的に砕いてしまっている。

「お前の我執は全部、私が十字架で引き受けたんだ」

と。これが絶対恩寵なんです。

十字架が絶対恩寵として受けとられていないところでは、本当に苦しいですよ。そのために一生懸命で、

「自分もこの十字架と同じような苦難を通らなければ」

と、そういう角度になってくる。それでもつて、すべて生活が勤行的になる。その努力は決して虚<sup>むな</sup>しいとは思わなければいけません、しかし、そのために本当に暗礁に乗り上げたり、無理をして生命を落とした人が幾人もいます。

キリストの十字架は私たちに、

「そういつた苦行は要らん」

と言っている。苦行は要らんけれども、患難には遭いますよ。けれども、自ら苦行するよいうな、その角度は要らない。お釈迦さんもそうだ。最後に、



「難行苦行ではなかった」

とお釈迦さんは悟った。

禅宗は難行苦行的な聖道門だ。ところが、浄土真宗は易行道です。弥陀の本願に依って行く。キリストの本願に依って行くのが、これがこの十字架の絶対恩寵ですから。「絶対」ということは決して観念で言っているのではない。相対を絶するというんだから。自ら苦行するような角度は、それは苦しくなる。福音は喜びのおとずれなんだ。もう自分の過去も現在も未来も問題にするな。問題はただ、このキリストの生命を受け、力を受けることだ。それを生命と言い、力と言い、愛と言おうが全部、聖霊の内容です。

### ●十字架聖霊即復活の生命

キリストは十字架にかかりました。これは自ら架かったんだ。架けられたというのは相対的な現実だ。彼はいきなり天界へ行けたが、自ら生命を棄てた。

「人の罪のためにお前は十字架にかかれ。旧約聖書の贖いを完全にお前は全うしろ」というのが、ゲッセマネで神さまが言われた言葉だから。それで、彼は

「私はいきなり天界へ往きたいけれども、そうはいきません。汝の御意に従います」

と。イザヤ書53章です。ヘブル書11章以下で徹底的にそのことが解明されている通り、十字架です。

そして今度は、キリストは復活しました。これは「ただ息を吹き返した」のではない。キリストが本来持っている霊生が、霊的生命が現れたわけです。もの凄い現実です、これは。到底、想像がつかん。だから、私は

「聖書の現実には全く参ったと降参しなければこの世界に入れない」

とはつきり言っている。いくら聖書の研究をしたって——研究は悪くはない——けれども、研究では入れません。

それから、キリストは昇天してしまった。天界へ昇ってしまった。それから、聖霊を降した。こういう順序です。もうはつきりしている。

我々は、この十字架を受けとる。十字架の絶対恩寵の贖いを受けとる。だから、そこではもう、私は無いんだ。だから、私は「無者」と言っている。

「私はキリストの無者だ」

と言っているのは、何も自分で無になっただけでも、悟ったのでも何でもない。キリストが十字架によって私に下さったところの、私無き世界、私無き現実です。この中に本当に入ってごらん。

キリストは神さまの無者なんです。自分を何ものともしなかったでしょ。ヨハネ伝をよく読んでください。はつきりそう言っているから。

「我を見し者は父を見しなり」



という無限無量者になったんです。

「無者即無限無量者」

という。どこが間違っているか。キリストに聞いてください、間違っているかどうかを。無教会であろうが、教会であろうが、私の真意が受けとられない。私はやっぱりキリスト教界で孤独です。いいんです、それで。もう、死に至るまで絶対にこのことは叫んで進んで行きます。

そうすると今度は、十字架で賜って無とされると、祈りの世界で入ってくるのが、この聖霊なんです。御霊のキリストが入ってくる。

「キリストわがうちに」

と、パウロが言った。パウロはわざわざ、「キリストの御霊」とか「御霊のキリスト」とか言わないで、「キリストわがうちに」と言った。いいですよ、それで。パウロはそんな平面論理の分析的なことは言わないんだ。いつも渾然こんぜんとしているから。

そうすると、これが本当に復活の生命が来るんです。聖霊によって新生するわけです。こういう構造なんだ。十字架聖霊即復活の生命。我々はキリストの復活の生命をいただいているわけです。日曜日にはいつもこうやって復活しているんだ。日曜日にはキリストが復活した。復活の記念日なんだ、この日曜日というのは。だから、

「日曜日には集会に来なさいよ」

と言うのに、なかなか来ない人がいるけれども。

「もうちよつと、もうちよつと待って」

なんて言って。

そうでしょ。「新生」と言おうが、「復活の生命」と言おうが、どちらでも構わない。

「ひと新あらたに生まれずば、神の国を見ること——或いは入ること——あたわず」

という。「ひと天から生まれずば」と同じことです。

### ●使徒的信仰に帰れ

磐上の家という。キリストという磐の上に柱で食い込んだところの、そういう家に成れと。

ということとは、我々は

「キリストの聖霊によって本当に、十字架・聖霊を土台としたところの家と成れ」

ということですよ。「幕屋」であろうが、「家」であろうが、いいですよ、どうだって。家は不動の姿だ。幕屋は旅の姿。いろいろな表現で言うだけの話です。

そうすると、さっき言った、プロテスタントやカトリックではないということ。もうひとつ先の、

「使徒的信仰に帰れ。キリストの直弟子の信仰に帰れ」

と、私は言っているそこは、聖霊が常に躍動している世界だから、「信仰の、行為の」なん



ていう二段構えの問題はなくなってしまう。

地上では誰だつて「全く」は成れませんよ。キリストは

「父の全きまいったが如く全かれ」

なんて凄いいことを仰るけれどもそれはできない。けれども、聖霊は完全性を持っているから、

「私たちは三日月であっても、それは満月に必ず成る」

という。私たちは満月を宿しているところの三日月であるということ。

私に手紙をくれた人がある。この人はクリスチャンではない。ドイツ文学の錚々たるひとです。けれども、彼は私の著作集を読んで、感嘆して手紙をよこされた。

「第一巻には無者キリストを論ぜられ、第二巻にはゲーテ、ダンテを引いて芸術を論ぜられていますが、正に縦横無尽のご解説、これほど自由に奔放に創造的に、思索と信念とを展開されたものは未だかつてなかったのではないかと思えます。」

と。正直だね、彼は。本当にそう感じている。クリスチャンはこういうことを言ってくれないですよ。そういうように感じないんだ、普通のクリスチャンは。

「これほど重大な巨大な告白を限らない情熱をもって、まるで噴出する泉のように書かれていることこそ驚くべきことで、正しく驚嘆せざるを得ません。あなたの偉大な告白がどこから来るか、何故この告白の洪水に身を任せられたのか、何があなたの心に呼びかけて、あなたの情熱に火を点じたのか、およばずながら私は極力探究して行こうと思っています。」

だつてさ。まあ、そのうちに彼と会つて、一対一で話したいと思つてます。彼は非常な学者なんです。しかし、この非常な学者が私にこのようにして、正直、驚嘆した。私にはない。この真理の事態にです。私は

「あなたこそ神さまに近いんだよ」

と返事を書いた。普通、そのような正直な驚嘆をしない。彼は明治時代の有名な国文学者の息子さんです。

### ●有れども無きが如し

私たちには聖書が、キリストの御言の奥の神の根源語がそうやって響いてくるから。文字面を読んでいるのではない。

「キリストという磐の上に私たちは建っている。どんな嵐でも来てみる」

と、それだけのことはこの聖霊の力ではつきり言える。だから、すったもんだではない。

マタイ伝7章13節に、

「<sup>13</sup>狭き門より入れ、滅ほろびにいたる門は大きく、その路は広く、之より入る者お

おし。<sup>14</sup>生命いのちにいたる門は狭く、その路は細く、之を見出すもの少なし」

と書いてある。また、マタイ伝19章24節に、



「<sup>24</sup>また復なんじらに告ぐ、富める者の神の国に入るよりは、駱駝らくだの針あなの孔あなを通るかた反かえつて易やすし」

という。「富める者」というのは、なにも金を持っていない者ばかりでない。自分に富んでいる者、自己を主張している者。これはみな「富める者」です。自己主張者、自己直接肯定者。そういった者はダメだと。この「狭き門」は——何も持たない、有れども無きが如しという世界、いや実に「無者」です——そういう者だけが入って行けるんだと。自分を何ものともしない者がこの狭き門を入れる。自分を何かと思っている者は、この狭き門を入れない。福音の真理は万人に開かれている。

「或るものを持たなければいかん」

と言うと、これは条件の世界です。条件付きではない。無条件なんです。無条件ということとは何も要らないということ。何も要らない、自分を何ものともしない者だけが、この狭き門を通れるという。おもしろいね。何か持っていたらダメなんだ。引つ掛かってしまう。体力も気力も知力も、とにかく、私しているものはダメだと。「捨てる」と言ったら、それはみんな結構なものですよ。

「それを私しないで神さまのものとして自覚しろ」

ということです。才能のある人は、

「これは神さまのものだ、神さまの栄光が現れるためにあるんだ」

と。自分のものだと思うから、誇る。これは地獄へ往く。サタンは自己を誇る者である。パウロも誇りが強かった男なんだけれども、それを

「塵芥ちりあくたの如く思う」

と言っている。いいですね。

## ●第二の自然人

そういう問題に徹底的に来ないんだね、あのプロテスタントやカトリックを見ていると。

「ただ信仰だ」

「ただ行為だ」

なんてやっている。もうひとつ奥の世界なんです。

「義認と聖化」

ということを一生懸命に問題にして、結論が出たような出ないようなことになっている。あれは出てやしませんよ。「義認と聖化」なんていうものを問題としながら、

「こんなものは問題ではありません」

というところに来なければダメです。そこが誰も言えない。

むしろ、この

「廓然無聖かくねんむしよう」



というのは素晴らしい。これは碧巖録の第一則のところの言葉です。廓然として無聖だという。さすが、白隠や何かはそういう世界を捉んでいる。聖だとか、穢れだとか、そんなことを言っている世界ではない。もうひとつ奥の世界は、そんなことは問題にしない広大無辺な世界だということ。それを「空」とか「無」とか言うんです。そこはもう、旧約の範囲を越えるね。パウロの終りの方のエペソ書、ピリピ書、コロサイ書、あの辺にくると、そういう世界に入る。

あなた方、聖書に食いつきなさいよ。そうして、本当に瞑想しながら、聖書の言葉の奥を読むようになりなさい。読むことが直ちに祈りとならなくては。

「読んでから、祈りましょう」

ではない。祈り入るんです。読み入り、祈り入る。私がなぜ、力があるか、生命があるかという、そういう世界に自分を入れてしまっているからです。私の力ではない。キリストの力なんだから、仕方がない。

「仕方がない。やむを得ざるなり」

という世界だ。西郷南洲が、この「やむを得ず」の世界を動いていた魂です。「やむにやまれずして」という。何かしようと思うのではない。止むにやまれずして自然の如く動く。第二の自然人となるわけです。そうしたら、何を読んでも、何をやっても、楽しくてしょうがない。疲れを知らない人になる。

漱石が、

「則天去私」

と言った。あれは私は非常に好きな言葉です。

「天に則して己を去る」

という。則天去私というのは、キリストに來ると、これができるわけです。則天去私というのは、聖霊の世界の賜物の現実、賜りたる現実なんです。

私はD大学の校歌を作詩したが、その第3節の終りの方の文句に、

「真理を愛して生命あり

天に即して大和あり

ああ創造の精神は広し」

とある。入学式、卒業式にはあれを歌うけれども、本当に魂を込めて歌っているか。「これはもの凄い校歌ですね」

と言うひとはいないものな。本当に感じてないから。私はなにも自分が誉められたいのではない。真理に共感してもらいたいだけだ。共鳴する、共鳴盤がなかなかないんだ。

## ●聖霊の権威

### 7章15節に、



15 偽預言者に心せよ、羊の扮装して来れども、内は奪い掠むる豺狼なり。  
 「偽預言者に気をつけろ。外側は羊のようだけれども、狼のようなやつがいるから」  
 なんて、キリストが言ってる。白きサタン」というのがある。

それから、大事なのは7章21節です。

21 我に対して主よ主よという者、ことごとくは天国に入らず、ただ天にいます我が父の御意をおこなう者のみ、之に入るべし。

と。これはまた非常に重要な言葉です。

「天にいます我が父の御意をおこなう者のみ天国に入れる」

と。御意を行うことは如何にして可能かという点、これはもう決まっている。聖霊の世界に入らなければ、御意は行えない。

「御霊を受ければ、力が来る。また、私の言ったり為したことが全部分かってくる」

とキリストは言っておられる。

「祈って待っている。聖霊が来たら、お前たちは力を受けるぞ」

と。使徒行伝の始めの方に書いてある。

28 イエスこれらの言を語りおえ給えるとき、群衆その教に驚きたり。

それは驚くよ。驚いたどころではない。驚き倒れなくては。驚倒しなくては。

29 それは学者らの如くならず、権威ある者のごとく教え給える故なり。

「権威」は御霊の権威、聖霊の権威です。神の権威です。「如く」ではない。「らしく」です。「権威ある者らしく教え給える故なり」

です。我々はその聖霊におけるところの権威が澎湃として行為ともなり、言葉ともなり、実存となっていく。私の書いたものは、そういう意味において頭でひとつも書いていません。独文学者のH君が本当に共感してくれた。

「あなたの言葉は百万の味方だ。こういうことを本当に正直に感ずる人がほとんどいないんだ」

と私は手紙に書いた。あなた方はもちろん感じていらつしやるけれども。私の本をお読みになるときは、本当に私の親しき手紙と思つて読んでください。だから、これからはもう手紙は書かないことにしよう。葉書くらいは書くけれども。これは半分冗談だけれどもね。そういうわけで、皆さんも、この御霊の世界では本当に何もものも恐れない、この神の権威です。ということ、自分ではいつも平伏しの魂です。自分が威張つたら、権威が今度は、サタンの権威になつて、とんでもないことになる。平伏しの魂でないと、この神の権威はやつてこない。はつきりしています。魂の世界はごまかしがきかないですから。

